

梶井基次郎
堀辰雄

中島

敦集

35

日本文学全集



梶井基次郎
堀辰雄集
中島敦

日本文学全集 35



筑摩書房

日本文学全集 35 梶井基次郎 堀辰雄 中島 敦 集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 梶井基次郎 中島 敦
堀辰雄

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一—七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

梶井基次郎集 目次

檸檬

五 筧の話

七

城のある町にて

九 冬の蠅

七

泥濘

六 器樂的幻覺

八

路上

四 ある崖上の感情

六

過古

三 桜の樹の下には

六

雪後

四 愛撫

九

ある心の風景

四 闇の絵巻

一〇

Kの昇天

五 交尾

一〇

冬の日

五 のんきな患者

一〇

蒼穹

七

堀 辰雄集 目次

ルウベンスの偽画

三 聖家族

一

美しい村	一五	晩夏	二九
風立ちぬ	一六	菜穂子	三〇
かげろふの日記	二〇	曠野	三三
ほととぎす	二七		

中島 敦集 目次

山月記	三三	幸福	四一
悟浄出世	三五	名人伝	四七
悟浄歎異	三九	李陵	四三

年譜	四一
人と文学	四四
吉田健一	

梶井基次郎集

冬之蠅

冬之蠅とは何か？

~~彼等は~~ ~~連続~~ ~~な~~ ~~と~~ ~~なく~~ ~~糸~~ ~~の~~ ~~目~~ ~~に~~ ~~虫~~ ~~れ~~

ちやりに来りた。よぼよぼと ~~糸~~ ~~の~~ ~~目~~ ~~に~~ ~~虫~~ ~~れ~~

歩いてゐる蠅、~~糸~~ ~~の~~ ~~目~~ ~~に~~ ~~虫~~ ~~れ~~ 指を近づけても

逃げ去い蠅。そして飛べぬのかと思つ

てゐるとやはり飛ぶ蠅。~~糸~~ ~~の~~ ~~目~~ ~~に~~ ~~虫~~ ~~れ~~ 一体

彼等はどこ~~で~~ ~~夏~~ ~~の~~ ~~不~~ ~~逞~~ ~~さ~~ ~~や~~ ~~憎~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~け~~

~~た~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~糸~~ ~~は~~ ~~し~~ ~~こ~~ ~~を~~ ~~失~~ ~~つ~~ ~~て~~ ~~來~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~む~~

あらう、色は不鮮明に黒~~い~~ ~~ん~~ ~~で~~、翅体は

樽 様

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終^{せむ}圧へつけてゐた。焦燥^{せうそう}と云はうか、嫌悪^{けんあく}と云はうか——酒を飲んだあとに宿酔^{しゆくすい}があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたとんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた。蓄音器を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けてゐた。

何故だか其頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかつた街だとか、その街にしても他所^{よそ}他所^{よそ}しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転してあつたりむさくるしい部屋が覗いてゐたりする裏通り

が好きであつた。雨や風が蝕^{むし}んでやがて土に帰つてしまふ、と云つたやうな趣きのある街で、土塀が崩れてゐたり家並が傾きかかつてゐたり——勢ひのいいのは植物だけで、時とすると吃驚^{おどろ}させるやうな向日葵^{ひまわり}があつたりカンナが咲いてゐたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのやうな市へ今自分が来てゐるのだ——といふ錯覚を起さうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安静がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂ひのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其処で一月程何も思はず横になりたい。希^{ねが}はくは此処が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかつた街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失ふのを楽しんだ。

私はまたあの花火といふ奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つばい絵具で赤や紫や黄や青や様ざまの縞模様を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火といふのは一つづつ輪になつてゐて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を咬つた。

それからまた、びいどろと云ふ色硝子で鯛や花を打出し

てあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めて見るのが私にとつて何ともいへない享樂だつたのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落魄れた私に蘇つてくる故だらうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたやうな味覚が漂つて来る。

察しはつくだらうが私にはまるで金がなかつた。とは云へそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める為には贅沢といふことが必要であつた。二銭や三銭のもの——と云つて贅沢なもの。美しいもの——と云つて無気力な私の触角に寧ろ媚びて来るもの。——さう云つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所は、例へば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切り細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛筆を一本買ふ位の贅沢をするのだつた。然し此処ももう其頃の私にとつては重くるしい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のやうに私には見えるのだつた。

ある朝——其頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を転々として暮してゐたのだが——友達が学校

へ出てしまつたあとの空虚な空氣のなかにぼつねんと一人取残された。私はまた其処から彷徨ひ出なければならなかつた。何か私を追ひたてる。そして街から街へ、先に云つたやうな裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立留つたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、たうとう私は二条の方へ寺町を下り、其処の果物屋で足を留めた。此処でちよつと其の果物屋を紹介したので、其の果物屋は私の知つてゐた範圍で最も好きな店であつた。其処は決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物は可成勾配の急な台の上に並べてあつて、その台といふのも古びた黒い漆塗りの板だつたやうに思へる。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリュームに凝り固まつたといふ風に果物は並んでゐる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれてゐる。——實際あそこの人參葉の美しさなどは素晴しかつた。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

また其処の家の美しいのは夜だつた。寺町通は一体に賑かな通りで——と云つて感じは東京や大阪よりはずつと澄んでゐるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出てゐる。それがどうした訳かその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接してゐる街角になつてゐるので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通に

ある家にも拘らず暗かつたのが瞭然しない。然し其の家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思ふ。もう一つは其の家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のやうに——これは形容といふよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げてゐるぞ」と思はせる程なので、廂の上はこれも真暗なのだ。さう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のやうに浴せかける絢爛は、周囲の何者にも奪はれることなく、肆にも美しい眺めが照し出されてゐるのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで来る往來に立つて、また近所にある鎗屋の二階の硝子窓をすかして眺めた此の果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。

その日私は何時になくその店で買物をした。といふのはその店には珍らしい標幟が出てゐたのだ。標幟など極くありふれてゐる。が其の店といふのも見すばらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一体私はあの標幟が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたやうなあの単純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。——結局私はそれを一つだけ買ふことにした。それからの私は何処へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。始終私の心を圧へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んで来たと思つて、私は街

の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる——或ひは不審なことが、逆説的な本当であつた。それにしても心といふ奴は何といふ不可思議な奴だらう。

その標幟の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃は肺尖を悪くしてゐても身体に熱が出た。事実友達に誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合ひなどをして見るのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだつた。

私は何度も何度もその果実を鼻に持つて行つては嗅いで見た。その産地だといふカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つた「亮柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」といふ言葉が断れぎれに浮んで来る。そしてふかふかと胸一杯に匂やかな空気を吸込めば、つひぞ胸一杯に呼吸したことになつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだつた。……

實際あんな単純な冷覚や觸覚や嗅覚や視覚が、ずつと昔からこればかり探してゐたのだと云ひ度くなつた程私にしっかりとしたなんて私は不思議に思へる——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな氣持さへ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のこ

など思ひ浮べては歩いてゐた。汚れた手拭の上へ載せて見たりマントの上へあてがつて見たりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり、

——つまりは此の重さなんだな。——

その重さこそ常づね私が尋ねあぐんでゐたもので、疑ひもなくこの重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思ひあがつた諸諱心からそんな馬鹿げたことを考へて見たり——何がさて私は幸福だつたのだ。

何処をどう歩いたのだらう、私が最後に立つたのは丸善の前だつた。平常あんなに避けてゐた丸善が其の時の私には易やすと入れるやうに思へた。

「今日は一つ入つて見てやらう」そして私はづかづか入つて行つた。

然しどうしたことだらう、私の心を充してゐた幸福な感情は段々逃げて行つた。香水の壇にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て單めて来る、私は歩き廻つた疲労が出て来たのだと思つた。私は画本の棚の前へ行つて見た。画集の重たいのを取り出すのさへ常に増して力要るな！と思つた。然し私は一冊づつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐつてゆく気持は更に湧いて来ない。然も呪はれたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでゐて一度バラバラとやつて見なくては気が済まないのだ。それ

以上は堪らなくなつて其処へ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさへ出来ない。私は幾度もそれを繰返した。たうとうおしまひには日頃から大好きだつたアングルの橙色の重い本まで尚一層の堪へ難さのために置いてしまつた。

——何といふ呪はれたことだ。手の筋肉に疲労が残つてゐる。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めてゐた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだらう。一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの交にそぐはない気持を、私は以前には好んで味つてゐたものであつた。……

「あ、さうださうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶ひ出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試して見たら。「さうだ」

私にまた先程の軽やかな昂奮が帰つて来た。私は手当り次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加へたり、取去つたりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなつたり青くなつたりした。やつとそれは出来上つた。そして軽く跳りあがる心を作しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据ゑつけた。そしてそれは上出来だつた。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諸調をひつそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カインと冴えかへつてゐる。私は埃つばい丸善の中へ空氣が、

その檸檬の周囲だけ変に緊張してゐるやうな気がした。私はしばらくそれを眺めてゐた。

不意に第二のアイディアが起つた。その奇妙なたくらみは寧ろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしてにおいて私は、何喰はぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐつたい気持がした。「出て行かうかなあ。さうだ出て行かう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなに面白いだらう。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みぢんだらう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

(大正十四年一月)

城のある町にて

ある午後

「高いとこの眺めは、アアツ（と咳をして）また格段でござすな」

片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持つてゐる。頭が奇麗に禿げてゐて、カンカン帽子を冠つてゐるのが、まるで栓をはめたやうに見える。——そんな老人が朗らかにさう云ひ捨てたまま峻の脇を歩いて行つた。云つておいて此方を振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたまま、さもやれやれと云つた風に石垣のはなのベンチへ腰をかけた。——

町を外れてまだ二里程の間は平坦な緑。I湾の濃い藍がその彼方に拡つてゐる。裾のぼやけた、そして全体もあまりかつきりしない入道雲が水平線の上に静かに蟠つてゐる。——

「ああ、さうですなあ」少し間諷つきながらさう答へた時の自分の声の後味がまだ喉や耳のあたりに残つてゐるやう

な気がされて、その時の自分と今の自分とが交にそぐはなかつた。なんの拘りもしらないやうなその老人に対する好意が頼に刻まれたまま、峻はまた先程の静かな展望のなかへ吸ひ込まれて行つた。——風がすこし吹いて、午後であつた。

一つには、可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考へて見たいといふ若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出て此の地の姉の家へやつて来た。

ぼんやりしてゐて、それが他所の子の泣声だと気がつくまで、死んだ妹の声の気持がしてゐた。

「誰だ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思つてゐる。

彼女がこと切れた時よりも、火葬場での時よりも、交つた土地へ来てするこんな経験の方に「失つた」といふ思ひは強く刻まれた。

「たくさんの虫が、一匹の死にかけてゐる虫の周圍に集つて、悲しんだり泣いたりしてゐる」と友人に書いたやうな、彼女の死の前後の苦しい経験がやつと薄い面紗のあちらに感ぜられるやうになつたのも此の土地へ来てからであつた。そしてその思ひにも落ちつき、新しい周圍にも心が馴染んで来るに随つて、峻には珍らしく静かな心持がやつて来るやうになつた。いつも都会に住み慣れ、殊に最近は心の休む隙もなかつた後で、彼はなほさらこの静けさの中で恭

うやくしくなつた。道を歩くのにも出来るだけ疲れないやうに心掛ける。棘一つ立てないやうにしよう。指一本詰めないやうにしよう。ほんの些細なことがその日の幸福を左右する。——迷信に近い程そんなことが思はれた。そして旱の多かつた夏にも雨が一度来、二度来、それがあがる度毎に稍々秋めいたものが肌に触れるやうに気候もなつて来た。さうした心の静けさとかすかな秋の先駆は、彼を部屋の中の書物や妄想にひきとめてはおかなかつた。草や虫や雲や風景を眼の前へ据ゑて、秘かに抑へて来た心を燃えさせ、——ただそのことだけが仕甲斐のあることのやうに峻には思へた。

「家の近所にお城跡がありまして峻の散歩には丁度良いと思ひます」姉が彼の母の許へ寄来した手紙にこんなことが書いてあつた。着いた翌日の夜、義兄と姉とその娘と四人で初めて此の城跡へ登つた。早の為うんかがたくさん田に湧いたのを除虫燈で殺してゐる。それがもうあと二三日だからといふので、それを見にあがつたのだつた。平野は見渡す限り除虫燈の海だつた。遠くなるると星のやうに瞬いてゐる。山の峽間がぼうと照されて、そこから大河のやうに流れ出てゐる所もあつた。彼はその異常な光景に昂奮して涙ぐんだ。風のない夜で涼みかたがた見物に来る町の人びとで城跡は賑はつてゐた。暗のなかから白粉を厚く塗つた町の娘達のはしやいだ眼を光らせた。

今、空は悲しいまで晴れてゐた。そしてその下に町は薨を並べてゐた。

白聖の小学校。土蔵作りの銀行。寺の屋根。そして其処此処、西洋菓子の中に詰めてあるカンナ屑めいて、緑色の植物が家々の間から萌え出てゐる。或る家の裏には芭蕉の葉が垂れてゐる。糸杉の巻きあがつた葉も見える。重ね綿のやうな恰好に刈られた松も見える。みな駒んだ下葉と新しい若葉で、いい風な緑色の容積を造つてゐる。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんとかと白くペンキで書いた屋根が見える。

日をうけて赤い切地を張つた張物板が、小さく屋根瓦の間に見える。――

夜になると火の点いた町の大通りを、自転車でやつて来た村の青年達が、大勢連れで遊廓の方へ乗つてゆく。店の若い衆なども浴衣がけで、昼見る時とはまるで異つた風に身体をくねらせながら、白粉を塗つた女をからかつてゆく。――さうした町も今は屋根瓦の間へ挟まれてしまつて、そのあたりに幟をたくさん立てて芝居小屋がそれと察しられるばかりである。

西日を除けて、一階も二階も三階も、西の窓をすつかり日覆をした旅館が少々近くに見えた。何処からか材木を叩く音が――もともと高くもない音らしくつたが、町の空へ「カーン、カーン」と反響した。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の変化をやつてゐるやうだな」ふとそんなに思つて見て、聞いてゐると不思議に興が乗つて来た。「チュクチュクチュク」と始めて「オーシ、チュクチュク」を繰返へず、そのうちにそれが「チュクチュク、オーシ」になつたり「オーシ、チュクチュク」にもどつたりして、しまひに「スツトコチーヨ」「スツトコチーヨ」になつて「チー」と鳴きやんでしまふ。中途に横から「チュクチュク」とはじめるのが出て来る。するとまた一つのは「スツトコチーヨ」を終つて「チー」に移りかけてゐる。三重四重、五重にも六重にも重なつて鳴いてゐる。

峻は此の間、やはりこの城跡のなかにある社の桜の木で法師蟬が鳴くのを、一尺程の間近で見た。華車な骨に石鱗玉のやうな薄い羽根を張つた、身体の小さい昆虫に、よくあんな高い音が出せるものだと、驚きながら見てゐた。その高い音と関係があると云へば、ただその腹から尻尾へかけての伸縮であつた。柔毛の密生してゐる、節を持つた、その部分は、まるでエンヂンの或る部分のやうな正確さで動いてゐた。――その時の恰好が思ひ出せた。腹から尻尾へかけてのブリツとした膨らみ。隅ずみまで力ではち切つたやうな伸び縮み。――そしてふと蟬一匹の生物が無上に勿体ないものだといふ氣持に打たれた。

時どき、先程の老人のやうにやつて来ては涼をいれ、景色を眺めてはまた立つてゆく人があつた。

峻が此処へ来る時によく見る、亭うちんの中で昼寝をしたり海を眺めたりする人がまた来てゐて、今日は子守娘と親しうに話をしてゐる。

蟬取竿を持つた子供があちこちする。虫籠を持たされた児は、時どき立留つては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに随まいてゆく。物を云はないでゐて爰に芝居のやうな面白さが感じられる。

またあちらでは女の子達が米つきばつたを捕へては、「ねぎさん米つけ、何とか何とか」と云ひながら米をつかせてゐる。ねぎさんといふのは此の土地の言葉で神主のことを云ふのである。峻は善良な長い顔の先に短い二本の触角を持つた、さう思へばいかにも神主めいたばつたが、女の子に後脚を持たれて身動きのならないままに米をつくの恰好が呑気なものに思ひ浮んだ。

女の子が追ひかける草のなかを、ばつたは二本の脚を伸し、日の光を羽根一ぱいに負ひながら、何匹も飛び出した。時どき烟を吐く煙突があつて、田野はその辺りから展けてゐた。レムブランドの素描めいた風景が散ばつてゐる。

黝くろい木立。百姓家。街道。そして青田のなかに褪た緒との煉瓦の煙突。

小さい輕便けいべんが海の方からやつて来る。

海からあがつて来た風は輕便の煙を陸の方へ、その走る方へ吹きなびける。

見てゐると煙のやうではなくて、煙の形を逆に固定した

まま玩具の汽車が走つてゐるやうである。

サ、サ、と日が翳かげる。風景の顔色が見る見る變つてゆく。遠く海岸に沿つて斜に入り込んだ入江が見えた。——峻は此の城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖になつてゐた。

海岸にしては大きい立木が所どころ繁つてゐる。その蔭にちよつぱり人家の屋根が覗いてゐる。そして入江には舟が舫はつてゐる氣持。

それはただそれだけの眺めであつた。何処を取り立てて特別心を惹くやうなところはなかつた。それでゐて爰に心が惹かれた。

なにかある。本当になにかがそこにある。と云つてその氣持を口に出せば、もう空ぞらしいものになつてしまふ。

例へばそれを故のない淡い憧憬しょうけいと云つた風の氣持、と名づけて見ようか。誰かが「さうぢやないか」と尋ねて呉れたとすれば彼はその名づけ方に賛成したかも知れない。然し自分では「まだなにか」といふ氣持がする。

人種の異つたやうな人びとが住んでゐて、此の世と離れた生活を営んでゐる。——そんなやうな所にも思へる。とはいへそれはあまりお伽話とがばなしめかした、びつたりしないところがある。

なにか外国の画で、彼処あそこに似た所が描いてあつたのが思ひ出せない為ではないかとも思つて見る。それにはコンステイブルの画を一枚思ひ出してゐる。やはりそれでもない。

では一体何だらうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添へるものである。然し入江の眺めはそれに過ぎてゐた。そこに限つて気韻が生動してゐる。そんな風に思へた。――

空が秋らしく青空に澄む日には、海はその青より稍々温い深青に映つた。白い雲がある時は海も白く光つて見えた。今日は先程の入道雲が水平線の上へ拡つてザポンの内皮の色がして、海も入江の真近までその色に映つてゐた。今日も入江はいつものやうに謎をかくして静まつてゐた。

見てゐると、獣のやうにこの城のはなから悲しい唸声を出して見たいやうな気になるのも同じであつた。息苦しい程妙なものに思へた。

夢で不思議な所へ行つてゐて、此処は来た覚えがあると思つてゐる。――丁度それに似た気持で、えたいの知れない想ひ出が湧いて来る。

「あゝかゝる日のかゝるひととき」

「あゝかゝる日のかゝるひととき」

何時用意したとも知れないそんな言葉が、ひらひらとひらめいた。――

「ハリケンハッチのオートバイ」

「ハリケンハッチのオートバイ」

先程の女の子らしい声が峻の足の下で次つぎに高く響いた。丸の内の街道を通つてゆくらしい自動自転車の爆音がきこえてゐた。

この町のある医者がそれに乗つて帰つて来る時刻であつた。その爆音を聞くと峻の家の近所にゐる女の子は我勝ちに「ハリケンハッチのオートバイ」と叫ぶ。「オートバイ」と云つてゐる兎もある。

三階の旅館は日覆をいつの間にか外した。

遠い物干台の赤い張物板ももう見つからなくなつた。

町の屋根からは煙。遠い山からは蜩。

手品と花火

これはまた別の日。

夕飯と風呂を済ませて峻は城へ登つた。

薄暮の空に、時どき、数里離れた市で花火をあげるのが見えた。気がつくくと綿で包んだやうな音がかすかにしてゐる。それが遠いので間の抜けた時に鳴つた。いいものを見る、と彼は思つてゐた。

ところへ十七程を頭に三人連れの男の兎が来た。これも食後の涼みらしかつた。峻に気を兼ねてか静かに話をしてゐる。

口で教へるのにも気がひけたので、彼はわざと花火のあがる方を熱心なふりをして見てゐた。

末遠いパノラマのなかで、花火は星水母ほどのさやけさに光つては消えた。海は暮れかけてゐたが、その方はまだ明るみが残つてゐた。

暫くすると少年達もそれに気がついた。彼は心の中で喜んだ。

「四十九」

「ああ、四十九」

そんなことを云ひあひながら、一度あがつて次あがるまでの時間を数へてゐる。彼はそれらの会話をきくとともにしに聞いてゐた。

「××ちゃん。花は」

「フロラ」一番年のいつたのがそんなに答へてゐる。――

城でのそれを憶ひ出しながら、彼は家へ帰つて来た。家の近くまで来ると、隣家の人が峻の顔を見た。そして慌てたやうに

「帰つておいでなしたぞな」と家へ云ひ入れた。

奇術が何とか座にかかつてゐるのを見にゆかうかと云つてゐたのを、峻がぼつと出てしまつたので騒いでゐたのである。

「あ。どうも」と云ふと、義兄は笑ひながら

「はつきり云ふとかんのがいかんのやさ」と姉に脊負はせた。姉も笑ひながら衣服を出しかけた。彼が城へ行つてゐる間に姉も信子（義兄の妹）もこつてり化粧をしてゐた。

姉が義兄に

「あんた、扇子は？」

「衣囊にあるけど……」

「さうやな。あれも汚れてますで……」

姉が合点合点などしてゆつくり捜しかけるのを、じゆうじゆうと音をさせて煙草を呑んでゐた兄は

「扇子なんかどうでもええわな。早う仕度しやんし」と云つて煙管の詰つたのを気にしてゐた。

奥の間で信子の仕度を手伝つてやつてゐた義母が「さあ、こんなは奈何やな」と云つて団扇を二三本寄せて持つて来た。砂糖屋などが配つて行つた団扇である。

姉が種々と衣服を着こなしてゐるのを見ながら、彼は信子がどんな心持で、またどんな風で着付けをしてゐるだらうなど、奥の間の気配に心をやつたりした。

やがて仕度が出来たので峻はさきへ下りて下駄を穿いた。「勝子（姉夫婦の娘）がそこらにゐますで、よぼつてやつとくなさい」と義母が云つた。

袖の長い衣服を着て、近所の子等のなかに雑つてゐる勝子は、呼ばれたまま、まだなにか云ひあつてゐる。

「『カ』ちつとこへ行くの」

「かつどうや」

「活動や、活動やあ」と二三人の女の子がはやした。

「ううん」と勝子は首をふつて

「『ヨ』ちつとこへ行くの」とまたやつてゐる。

「ようちえん？」

「いやらし。幼稚園、晩にはあれへんわ」

義兄が出て来た。